

イチジク

Curtain fig / *Ficus microcarpa* / Gajumaru / ガジュマル

ガジュマルは日本の南部からオーストラリアやインドの亜熱帯地域に多く分布し、奄美大島では海岸から山沿いの森の岩壁やの樹木の上に生育し、湿度の高い場所で見られる。無数の気根を地面に向けて幹や枝から垂らす特徴的な見た目を持つ。成長すると宿主植物の周りを巻き付き、栄養を遮断し、徐々に絞め殺すため「絞め殺しのイチジク」の一種とされている。葉は 5cm の濃い緑の楕円形をしている。他のイチジクと同様、花は種子の鞘の中で咲き、完熟すると一般的にイチジクと呼ばれる花嚢となる。また、受粉にはイチジクコバチの助けが必要なため、花嚢に入り産卵する。

森の精霊

奄美大島の伝説には、ケンムンと言う妖怪がガジュマルの木を住処としている。全身に赤みのかかった毛で覆われ、姿を変化させることができると言われている。木を守る者とも言われており、伝説によると人間に危害を与える存在ではないが、悪戯好きで、悪さをすることもある。

Sea fig / *Ficus superba* / Ako / アコウ

アコウはアジアの亜熱帯や熱帯地域に多く自生し、樹齢数百年も生き延びる。髭のような気根は幹に沿って、時には幹全体を覆い隠すこともある。野生動物によって運ばれた種子が親樹の上から生えることも多く、囲むように成長するため、養分を奪ってしまい、絞め殺すことから「絞め殺しのイチジク」とも呼ばれる。ガジュマルとも似ているが、2 倍の長さを持つ葉と幹や枝から直接生える実（花嚢）で区別ができる。花は 8 月ごろに咲き、雌花は雌の木に咲き、雄花は雄の木に咲く。アコウは常緑樹だが、葉を一気に落とし、新芽をすぐ出す様子から落葉樹と間違われることがある。奄美大島では防風林や生け垣として育てられているが、樹冠が大きいので、十分な場所が必要となる。ガジュマル同様、アコウもまた奄美大島の伝説の悪戯好きな妖怪、ケンムンの住みかと言われている。